二つの文化の架け橋

バレンタイン・A・レア氏
Valentine Lehr

“固定観念”とは容易に受け入れられ、時に捉えがたい方法で融けることもあるのです。枷、制限のある環境から上へ自ら凌いだ人間に、真価へと導かれることは何よりも影響があることなのです。その人は偏狭な考えの世界から心を開放する文化の架け橋なのです。

初めて彼に会った頃、私は広く海外を旅行していた事で開かれた精神、そして物事を理解する事に“かかん”だったと言えます。実際には“固定観念”を引きずり、特に日本に関してはそうでした。日本がかつて敵国で、その既成観念が至る所にはびこる中で私は育ったのです。ドイツ人である両親とは多くの間違った痕跡の為にぶつかり合いました。そういう経験から彼との出会いは予想通りのものでした。彼が西洋の文化の理解に鋭い興味を持っていた事を除けば。

私達はアメリカの事柄について話しましたが、私にとって数々の文化の違いを日本側から率直に説明してもらう事が重要だったのです。季節の行事、お祝い事のお菓子から文化を学んだ事もありました。“ひな祭り”は女の子にとって特別なお祝いの日です。光栄にもだるま（小さくて朱色で丸みのある木製の、、、、としか説明出来ないのですが。）を頂いた機会もありました。ある僧侶が瞑想し続けているうちにとうとう仏像になっていたという話は貴重な話であり、日本の古い文化のみならず、人間の本質にも洞察を与えてくれたのです。小さな事柄、しかし驚く程に素晴らしい教訓は文化の架け橋となるのです。

私の子供の頃の第二次世界大戦の記憶は僅かでありながら鮮烈です。彼とは小さかった頃の事や同じ年代であるという事を話しているうちに戦争について何を覚えているのかという話になったことがありました。私がはっきり覚えている思い出に1944−5年のある日、N. Y. での防空演習があります。道路の空襲警備員達を窓から見ていると街灯が消えて「家の灯りを消してカーテンを閉めるように」と、人々に叫んでいました。怖さとは無縁のものだったと覚えています。彼の方は防空壕の中に座り、地上からのどーんという響きをよりかかった壁ごしに感じていたそうです。また他の記憶に父の運転する車に乗っていた時、辺りで花火が始まった事です。それは勿論1945年の9月の終戦の日の事でした。彼の方は4月の数日間、名古屋の方角の夜空に燃える光が見えたそうです。その光はN. Y. での花火と同じく確かに終戦を示すものだったのです。

地球の半分は距離に隔てられ、文化に隔てられ、全く違う環境での経験をしながらも、私的な過去の話の中で奇妙にも繋がることもあるのです。説明するのは難しくもそれはまた一つの架け橋でもあるのです。